

(3) 送りがなについて

この問題についても、審議会とは根本的に異なった意見を持っていますので、私の見解を述べ、議論を戦わしたいと思います。

それは、「難読・誤読の恐れのあるものは多く送る」という考えについてです。具体的に言います。

まず「行^う」という送り方について考えたいと思います。「行^う」「行^く」という表記でも、活用が「わ行」と「か行」の四段活用ですからたとい文脈に頼らなくても、明瞭に区別がつきます。ただ促音便だけが同形になります。これは、文中では、「……^を行^{って}」「……^へ(に)行^{って}」で、混乱の余地はありません。「……^を行^{って}」を「……^をい^{って}」と読むような者は、「……^行な^{って}」としたところで、「……^をい^なって」と読むに違いありません。「……^を行^{って}」は誤読する恐れがあるが、「……^を行^なって」にすればその恐れがない、などという意見は、私には実にばかげて見えるのですが、皆さんいかがでしょうか。私の指導を受けた子供たちは、一年生でも「……^を行^く」「……^に行^く」だけ見せて、下を隠しても前者が「おこなう」であり、後者が「いく」であることを知っ

て、決してこれを混同しません。「な」を入れなければ誤読するような国語教育は、率直に言って、国語教育ではないと思います。

「実^行」「歩^行」。送りがななどなくても前者は「おこなう」後者は「いく」と区別できるものです。「right hand(右^手)」

「right angle(直^角)」

「right way(正^{しい}方法)」

英語でも、このように一つの言葉がいろいろと異なった意味に用いられます(この他「right whale(せみくじら)」などくじらの種類にも用いられますし、「all right」などの用法もあります。また、同じ発音で「write」があります)。

英語ではこういうことがあっても、区別する^{しるし}をつけよう、などと言い出す人はありません。文脈が「言葉の内容」を決定するのですから、そういうことは文脈に任せておけばよいのです。そういう判断力を養うのが国語教育の大切なねらいの一つであるはずで

「明」という字も同じです。私は昨年的一年生には、実験的に、形容詞の語尾はすべて「い」(く活用)もしくは「しい」(しく活用)だけにして

指導してみました。つまり「あかるい」は「明い」と表記したのです。「明け」は、「明い」を基にして「**明**い朝になること」を「夜が**明**ける」と言うのだと理解させました。すると、子供たちは、「明」という字を見れば「あかるい」という言葉と「あける」という言葉とが頭に浮ぶようになります。感字を言葉として理解すれば送りがなは少ないほど読みやすくなります。多いほど読みやすいというのは、漢字を言葉として理解していないからに違いありません。私は「一年生でも、送りがなが少ないために誤読することなど決してない」ということを実際の指導で明瞭に証明しています。

結局、「難読・誤読」の問題は、実は、「送りがな」**そのもの**にあるのではなく、**言葉の問題**、およびその**指導の問題**にあるのです。それは、私が自分で指導してみてはっきりとわかったのです。世の、**頭だけ**で考える学者にはわからないかも知れませんが、私にはよくわかるのです。言葉の指導が誤っていたら送りがなをいくら送ってみたところでだめです。問題は送りがななどいくら少なくても、誤読のないように指導することです。それは一年生でも十分に理解できることですか

ら、決してむずかしいことではないのです。